

『対決 安倍政権—暴走阻止のために』

——（学習の友社、定価 1300 円＋税）、3 月 1 日刊行。

はしがき

幸兵衛 2014 年もあと数日だが、一口で言うとアベノ何とかに覆われた妙な年だった。
隠居 戦前の一時期がデジャ・ヴュ（既視感）風に重なるのだ。

新聞に出ていた、このような会話が目につきました。これは松尾羊一さんが書かれた「長屋の隠居てれび指南帳」の最初の部分です。『毎日新聞』2014 年 12 月 25 日付夕刊に掲載されていました。

この幸兵衛と隠居との会話は、次のように続いています。

隠 ……アベノミクスには国家総動員法に近い気分が見え隠れするのだ。……「産めよ殖やせよ、国のため」って。……先日、NHK が斎藤隆夫の反軍演説を取り上げていたが、今の国会は「翼賛議員」だらけだ。

幸 政治に限らない。マスコミ、わけでもテレビの不元気さ。靱井勝人 NHK 会長以下経営委員の人選、一部の発言問題と「報道の公平」をめぐる自民党のテレビ局への圧力。……

隠 もちろん民主主義の今とは次元が違う。一方的なプロパガンダ放送のラジオと戦果報道の新聞、無関心な国民以外は「非国民」の時代に戻ることはないだろう。そう言い切れるか。

「そう言い切れる」と答えたい。そう言い切れる世の中にしていきたい。

そう思って、この本を書きました。そのためにも、安倍政権と真正面から「対決」しなければなりません。そのための武器を鍛え上げ、皆さんの手に届けることが私の責任であり役割だと思ったからです。

幸兵衛と隠居の会話にあるように、まるで「戦前の一時期」を目にするかのような光景が見え隠れする一年でした。力を信奉する好戦的軍国主義者によって「積極的平和主義」が唱えられ、非科学的な歴史修正主義と反知性主義の立場からの歴史認識や「教育再生」が押し

付けられ、自由と人権、法の支配を尊重しない人物による「価値観外交」が展開される。まるで「ブラック・ジョーク」のような光景ではありませんか。

その中心にいるのが、「もし私を右翼の軍国主義者と呼びたいのならどうぞ」と居直った安倍首相、その人です。このような人とは、まず「対決」する必要があります。そのための勇気を持ち、覚悟を固めることです。本書は、そのために書かれました。

14 年末の総選挙で安倍首相は「圧勝」したと豪語しています。しかし、実際にはアベノミクスによる景気回復の一点に争点を絞り、集团的自衛権行使容認、原発再稼働、TPP 参加、改憲など他の重要政策課題については徹底した争点隠しに終始しました。自民党への投票は「アベノミクスで景気が良くなるなら、もう少し様子を見てみよう」というもので、一種の「執行猶予」による支持であったと思われます。

この先、景気が回復せず、消費不況や物価高で生活が苦しくなれば、この「猶予」はたちまち解除され、安倍首相には「実刑判決」が下されるにちがいありません。それを「白紙委任された」などと勘違いして、集团的自衛権行使容認の法改定や川内原発の再稼働などで新たな「暴走」を始めれば、その時には大きなしっぺ返しを食らうことになるでしょう。すでに、自民党が全滅した沖縄の小選挙区では、そのような前例が生まれているのですから……。

また、1 月に入って「イスラム国」(IS) を名乗る過激派集団による人質殺害事件が発生しました。このような残虐非道で残忍な犯罪は許されるものではなく、断固として糾弾しなければなりません。日本全体が敵視され、今後も標的とされる危険性が生じたことも重大な問題です。

事件そのものは断じて許されない蛮行ですが、同時に、そのきっかけとなったのは安倍首相による「イスラム国」を名指ししての中東諸国への資金拠出表明であり、イスラエルとの友好関係を誇示した「挑発行為」だったという点も軽視するわけにはいきません。

IS からの殺害予告は安倍首相の言動に対する報復としてなされ、人質の一人であった湯川遥菜さんを殺害したあとの動画では、「日本政府が 72 時間以内に何もしなかったから殺害した。アベがハルナを殺害したのだ」と明言しています。もう一人の人質だった後藤健二さんの殺害を明らかにしたビデオでも「安倍(首相)よ、勝ち目のない戦争に参加するという無謀な決断によって、このナイフは健二だけを殺害するのではなく、お前の国民はどこにいたとしても、殺されることになる」と、安倍首相が名指しされていました。問題は安倍首相にあったのです。

首相の自己顕示欲と無分別が引き起こした悲劇が、今回の人質殺害事件でした。ひとりの愚かな首相の思慮に欠けたパフォーマンスが平和国家としての日本のイメージを大きく転換させ、世界中の日本人を危険にさらすことになったのです。

これもまた、安倍首相の暴走が招いた重大な惨事だったというべきでしょう。このような暴走を阻止するには、まず「対決」するしかありません。ブレーキをかけて、ストップさせ

ることです。同時に、対案を提起してハンドルを切り、進むべき方向を変えることも必要です。

ブレーキをかけるためには、猛スピードで突っ走っている安倍首相が目指しているこれからの日本とはどのようなものなのか、それがいかに危険で国民を不幸にする道なのかを、まず理解していただかなければなりません。そのために、本書が役立つことを願っています。

はしがき

第1章 総選挙での対決

(1) 勝利したのはどの政党か

寝込みを襲うような突然の解散／本当に勝ったのはどこか／各党の消長

(2) 鮮明になった自共対決

共産党の躍進／過去2回の躍進との比較／社会・労働運動にとっての意味

(3) 選挙と政党をめぐる諸問題

低投票率の背景と原因／小選挙区制は比例代表制に／政党助成金の廃止

第2章 憲法をめぐる対決

(1) 集団的自衛権の行使容認—何が問題か

海外で「戦争する国」にしてもよいのか／増大する危険性／行使が容認されたらどうなるのか／どこに問題があるのか

(2) 海外で「戦争する国」に向けての準備

着々と進んでいる軍事化／マスメディアの変容／特定秘密保護法の危険性／「教育再生」による内心への介入と支配／背景としての安保条約

(3) 改憲のもくろみを打破するために

本格化する改憲への取り組み／自民党改憲草案の危険性／基本的人権への無理解／九条改憲と国防軍の新設／イラク戦争と「イスラム国」人質殺害事件の教訓／「活憲」による憲法理念・条文の全面開花

第3章 生活をめぐる対決

(1) 幻想のアベノミクス

「アホノミクス」から「アホノミス」へ／貧困化の進展／格差の拡大

(2) 若者の困難と意識状況

青年が抱えている困難／学生生活の厳しさ／若者の意識状況の多様性／「無敵の人」の登場が意味するもの

(3) 社会保障の前途

「社会保障改革」という名の攻撃／命と暮らしの危機／財源をどうするのか

第4章 労働をめぐる対決

(1) 新自由主義と働く者の困難

市場原理主義とトリクルダウン理論／民営化は成功したのか／自己責任論と規制緩和の果て

(2) 規制緩和の落とし穴

三つの流れと「雇用改革」／規制をどう考えるか／少子化という「社会的ストライキ」

(3) ブラック企業もブラック社会もノー

派遣労働の拡大をめぐる攻防／労働時間規制の解除と雇用の流動化／規制緩和はどのような問題を引き起こすか／どのような労働・社会政策を目指すべきか

第5章 政治変革の展望

(1) 安倍政権が直面するジレンマ

共同の広がりや世論の変化／山積する難問とジレンマ／安倍「大惨事」内閣の「逆走」／「戦後70年」で問われる日本の進路

(2) 日本の「明日」としての沖縄

普天間基地の移設と辺野古での新基地建設／「一点共闘」から統一戦線へ／選挙や政党支持にも影響／沖縄での統一戦線の萌芽形態の誕生

(3) 革新運動・労働運動の役割とその刷新

新たな局面への対応／革新運動・労働運動の刷新に向けて／労働運動の発展に向けて／職場、産業、地域、職能の重視／階層別での取り組みの強化

あとがき

拙著『対決 安倍政権—暴走阻止のために』（学習の友社、定価1300円＋税）、3月1日刊行。

購入ご希望の方は学習の友社

<http://www.gakusyu.gr.jp/tomosya.html>

まで。